千社於多和む連

初へん

中

へ13
3167
2

岩井
天ノ正

誹諧堀之内詣中之巻

東都 十返舎一九著

第三章

条ふ孝行のあまり
播磨しさ月額ふ冷
丈夫のあるより。一盃機嫌ふ酒落くさくなる
づれ一人羽織着ものそのふ。蒲団がく一のおるト
小紋縮緬の尻をまくりあげ石谷一人ちゃ
の小袖ふ小紋あけの羽織。白茶のまんか菊の

めくりかし記
華頼おさ
低田
屋
二人がまほいから
負の杉

門 へ 13
號 3167
巻 2

[illegible]

第三章

東都 十返舎一九著

[illegible]中之巻

昭和九年九月二八日
購求

縫箔しするおび。まいりふうぞり人なると見へ。いづ
れも板ドあの繻絆。そでぐちうつしうけ
五ふうねかれのあかし。其人の関ゆもかまハ
ずっ慕中ふありくたやべりあかうちく二三だん
もさ人千六七の娘と三十ばかりのさしまいゞ
是由曽呂の かりしあをな縞の着物ふたく
かしもりつえふ茶裁め見人ねどもあり形しやんと
あて気のきいた風俗意気なるねぐひを冠りて

束髪。あとの かゝり その尻はしをおしをあげつ。小ぶ
あく「見あたきさうし。ゆかりうぬけしろいそどの
「さうさ女中のあつく尻つぎを。結ふうえあげう
ゆくへはんざうで かくめのぐもじく おめ人ぐどアたんあふ
気がもと。わち門とあづりふあるいて見なせ人下ぞ
をうけうれそく。此女ども何若ふやちり門とも
へきゆく ありうけ。完みとまうひあがう
きんがるアいやぞよ。夜更の さらへうてあうくの

気がちがつてをりいす。ありちらがかへるとおもへばやなばう
「まろ 主さんかまやうとしやう揚屋へ。さあ〳〵てうてえんなせへ。あらし
こんなことをいふて。あらう事かへ。おまへがその男の流まへ
ぞへしておきいすに。ほんにへらへらつくりづきだ「ひと 男づきがで
ござりませんが。ぞへしてつたでえへ金ませぬ「な そりや奇妙な話
見ろう、ありちらと。一切またかへぞへつが話「ま そのことは
あのさるへ。ぞへすえんと申すが「きんぞう 左様さ、それなさうござりもあり
やせう。ありちらが申する不断気ままのへいくうもあり

申ますう「まろ 主さんどうしいす。おまへなぞのやうに若い郎が
あつさにあるものぞへおゐ細いさるのお引合せで。こんな
嬉しいことは話へぞ「な 今世から あのへなんでおごりなせへ
「まろ おごるともく「な そうかで、しつかへ申りかけやせう 下に
そりやうきく事へある 茶やをよんでけて「まろ 申アく、うつに志やう「な おまへがそれもえいりまつせへ
「さほ イエありちらくアおさまへにやせう「な ハテいへなあ。他もかも
ありちらが呑込んでどうぞひくふえいりなせへ「サアく まア〳〵
泥きげん…いやうえのともの男のおもしろい事…
おかしきもおそう…茶やへ…「…ど…

名物
水飴所

さうでもよふお志なさるハまし〳〵「おめへの云事一ツ〳〵尽てた
まるでおのろけ話になりありますと 女「おまんまでござりまする。所で
酒にいたしませう まつ「イヤ飯ものむ酒もくひませぬ。マアちよつ
ぴりとしためで。一ぜん出せうじの晩飯屋にきやせう 女「かしこ
まりました トおくへ入りてまもなくおぜんさしみ出る おな「サアおあがりなさいまし。おめへ方へも
なさへなのよふひてとうぞ まつ「これハきついもの。そんなら今一ツ〳〵の
みとさせる揚ものおあがりへお取ぜんまい。ヲツト ありがたの大根おろし
ふ見とのとてうまごんきとう采としく。おめへにおあげ田の兵

天さうめ「さころとおさへこの女ぞ まつ「これハひどいそ〳〵
「まあ〳〵すんぐりおめへさんがこのいなさるところアおつちり
みやアさつそりおりやせん おな「ハテおるる所トやアさつそりや
せうろ。マア此屋へおめへにあげよう まつ「おれハいふ
入やせね おな「そこを無理にいてよいちがさけてあげ
ようといふらなどひとくちのんでおくなせへ まつ「ソリヤおめん
まつ様の出さう おな「ナニサ〳〵ヲツト〳〵それでよし。これハあつがてく
ト[illegible] まつ「サア〳〵おめへ

がくす。かゝるのばとばかりけなせん「ちよぼ」それでもたゞ一ツまへのおはなしぶらん
あめにぬれちやそうにならつちやア。あさのごくご様へおきさん「さつ」
さ様へ「てき」独ふりあ金も他生の縁ござりますごさんすころもちや様へ
けへアふあへごさんと出ちそうをしやせう。そのかはりに一日お
めへがくすアたくさんのしやし様へぜ「手ま」ころちゝもござんすござんす
るいおうさと一所になつて。お馴染の女郎でもあつらへ様へ
トてらつぼの女郎あ…あいさそめ…がなれて「ゑんぜう」のよおそくなり生さとおいでなされや
せんう「すゑ」十二三まで九ツになりやアなるめへアのつまなき「さつる」そんなら

ほうちやアお百姓とらく嬉しがらア。そうあつくあさがおへ出らつて
あつちで御得手やせう「おく」だがしおやア様へ「ざる」あんまり
きやつとまつておりますを トほめてもらはれぞとおもひけむとする「アう」そんなら今においで
はやさやせう。まうけなせへ トふくろの女を…「アう」ナニトふくり
おまへさんのおつくつて様へ…
御様へ。何やら。おつしやア年増のわけがらし「おく」そんなら貴三へ
さしあ。縁遠いおまへがのぞ「すゑ」十二あれがのぞおまへよおめでたくなるまで
おやアあるめへ ト …

せなかさすりてたゞそのまゝ
あるじふところへてを組うけて「モヽ」おかみさんがそこでござりますと「ズノ」
さやア申さ「男」じやくれい薬研堀ゞが。モヽ今の女どもを。
おかみさんがけたもんど猫「ズノ」たづねなりやしよ。どふろうさ
やうな顔ざといありつて居るもとが。あへまいりやすね「男」らんくされ
づさ。「男」じや髪のあやう人もまちとろう。おかみさんがこのおやう人も
参りやせう。アイヤア女まてでも。めつそふもない声さ「ズノ」女
あまみろへ。たんのとくさあらやアならぬ「太夫」ぞんアヽとそてさんど
国はあへまいやうんくさい。おかみ申しの「ズノ」さ紙ふ度の勘定でき

ざうさもろ「ズノ」ござりまするとろて。ねしがあの女どもへ。おどろうして
いつくさおやア猫「ズノ」「太夫」あきだろりであどろりのろ「女」そきどこ
ところ見ごろぬへねしが出しても。おとろねしと音曲
いうさ時。田町でのんき酒の猫へえんなおいらが出してあい
さへぞ「ズノ」そのふりぱし天王稿できとうが草履の鼻緒が
きまてさてるてそのたてちんへ。あきがさうろへて「太夫」
ねしもさこ猫へでいふりんどゞりやア茸町でねしがくんく。
登楼の縁とあれが挿つておかみさろう。みなくさ「ズノ」そのたい

あゝアア大福帳ハこゝさだ。だんごをくふておかえへ猫へ。
嘘をはくぜ「ア嘘するめんろ。あゝもそのざんどふ。げし
おくんなはいておて。ねしやァくちびるをまつくろにきさトやァ
猫へろ。ぱゝゆうる猫入ても犬はいれんど。ト、おやつはゞ
せんろさすしふこのつり
すろ不ひとゝの中でかんちゆうじまゆゝぶゝくてゞとおはゞなゝ
出てゆくしとおはすもおじさおかじてその由とふへので出る

第四章

慈悲に眼のあた廃頭
諺のわざ猿の定盤
世界佛法腹念佛ときく。鬼角こゝわれば猿生ごゑ由

半ぞでにふ祖師日蓮聖人のありがたとて。題目
ろゝ高声ふ題目も出ざれバと経本ふ阿弥陀
舗道つた葉仮でんがくの廣重張面せくるんでも
八文の法豆由れバ年付十二文の筆張あつかる龍と
仕る事の間のけたしるる。お疲さ楽がさえふふちて中(?)の
海づれの女おい女房もまんぞ。さんとあの弟子若るへの
さみ由股捷女ふ多筱つけとろふぞ。おしまれて安とかく
きのゆうぞゑく手癖大ぶしまふて。横ふ蝉くれさ女ふ

て白縫が里に行。其跡より来のまゝ若者の男は座頭の連かと見
れば拙者でもなく折く彼女がかゝる人ありて不可笑な見つる所
付をすると彼男も急くの自由をして其所へ寄かゝりて今宵宿を
お頼み申そ扨こそ此女の隠し男目此頃へ尋ねる由を縁り今日諸
の見人気あるを聞て来て余所の来をしらず一向知らず
知るなそりん勝た取直し是を手綱に付て彼女にそこうと人
の噂ね茶やを見ておかし申も候て
其儘を旅 女「モシへちつと休んで行ませう 座頭「ハイ番宜しう 女「さふしなさいませ

ト此茶やの門口へおいてある床几へどつかと腰をかけるとかの男もあとからつゞいて来りて
せうぎに腰をかけて。とうもとうけ。なんとおかみさん此所の
見んとこれへござとかんせきのせうぎ
おこし給ふ。茶やのかゝさん「よし〳〵おまへの方へまゐりまする
此茶ひとつあげませうト そこへ茶をそえる 座頭「おまへ茶よりも酒が
ひとつ呑たい。おまへの其の吸筒を出さねへか 女「アイ〳〵サア
呑なさへト たばこのひきだしからきせるを出して。きせるをあてがふと 座頭「ヲットあるぞ〳〵
ト此内この座頭は男へ たりとさらりと。あとから出して猿に見せてうけ。たのしんで
ゐるがやがて ちやうどさし出し。女に手をそへるとふところにつき給
さわると女がまつさて是へもそつと
あちらのかの男がつけてゐると 座頭「コリヤ、おまへ。ささぞ 女「アイ〳〵
座頭「そのくせ今ごろ何で 女「どふもあいそもありませんね 座頭「イヤ〳〵

盲目の
御利益を
家の内
日蓮上人

ありの内中

そこでもらひかねるあんど。サアひとつのめ「女　そんならちよつと
だろう。そしつぎさせませうぞ　ト　いつて男へさすると男へひとつはいゝやろうと
りつてくると　さぐりにかゝつてみれば男そのまゝひとつはさし　いふので男がうけてちやわんに
そうくとのんでまたいゝかひとつと茶見せ出してみつかせる
「ざとう　コレくそうなくちや
日比酒の白を。かくのもいやごとらひなづら。それへようくのむの
「女　ナァニそんなにのそれえませぬね「ざとう　それでも今ごろくと
のむおかしさ「女　あまへ茶をのこしく「ざとう　そんならちやけ
ござる。ハヽヽ。ドレくちよとふりよひとつはげ「女　ヤアまさひ顔が
みへぬ。コレくそうちへかつてみそへよるのに「ざとう　十二ぐれがのつて

ゐるさ「女　ヨフまきさまさる。爰の内も猿がゐますよ。その
猿めが吸筒紙あつちへやつているは「ざとう　ハヽヽ猿とは私が
へ。利根なりのざげな。あつらに酒をのませるておりますと
いつてござる。おもいろ呑して女「女　ソレ猿に酒をのませると
男「キャウく「ざとう　のむかく「女　のこりとはすもとよ「ざとう　そこへおいじ。ドレくどとふ
ゐる「女　イヤそちへよりなさんな。ひつうむせさせ　ト　酒内男もむすうに酒とつてのんでそろく
あひがまかりてざるのおぶつをちよまかう。ざとうのみをちよいとひつかく
「ざとう　アイ文え　イト大きな猿ござる。
ひつかきあんだいが。人るのかをなまぞ。アいてくく「女　あの

あつちへ逃（にげ）ましよ「座頭（ざとう） あまへちいさいはうが目がつぶれて猿と

いふものをとんとみるがない。猿ハどんななりで「女 猿のなりハ。

茶縞（ちやじま）の布子（ぬのこ）をきて。緋（ひ）の猿引（さるひき）をしめてゐますよ「座頭（ざとう） 十二猿が

布子をきて猿引をもつてゐる。ハテとんだもののやうだ ト此内男ハむすめに

女の手をひつぱり、ころんでとりよせ、女目くばせをしても、男ハ猿にたはむれてゐるゆゑ、かまわずにあちらのざしきへつれてゆき、にこにこともてなして

「座頭（ざとう） コリヤ〳〵おまへ〳〵。どこへいつた「女 アイ〳〵今ちよつと「座頭（ざとう） イヤ

どうも合点（がてん）がいかねへ。わしやどこへもいつて見るがよい〳〵

ト三下がり、おねがひのうたがはじまる。女のおびへ ひもをとつて女のおびへ くゝりつけ、そのひものはしを、ゆびへまきつけておく 「女 コリヤ

よいふうのなさる「かうしておけバどこへもゆくまいと気をもむのを

みろ ト此内男ハむすめにむかひ、女おびへゆびをさして、これざうりをいれねとりよ

てくださいませ。男ハ手をとり、ざしきへきて、女の手をとり、むりむたい

猿（さる）「座頭（ざとう） コリヤ〳〵又どこへいく「女 猿のはまを酔（よひ）にあてゝ。どうでも

ありませぬ「座頭（ざとう） 十二猿のおくハ。にくいやつだ ト そばにあつた紙をもつて、くゝりつけるまねをする男へ

女の手をとつて出てみるゆゑに、もつてゐたひものはしを女の

おびへくゝりつけて、あそびにゆくが、ざとうハもちさすりさすり「座頭（ざとう） あのうく。コリヤ

紐（ひも）がとけぬへ。おまへ〳〵。どこへ〳〵 ト ひもをたぐり、此内男ハざしきへ

わざとひきずつて、ざとうのかほをみる。ひもをひつぱりあいて、女ハひとりひもをてへもち、ざとうへ あざむきぶつかつておく。猿の

とうりひきずりのきりどころをあけてつれてゆく、おとなへざとうひとり。

「座頭（ざとう） どこへ〳〵。わしやどこへも出しはせぬぞ〳〵 ト いちゆうくさんにひもをたぐる。ひけバ猿

きやつくらひて。さるがきつく「アイタヽヽ。ヤアヽヽコリヤ。おまへがふところにつけておくから
ひもがさへて猿めが「キヤウヽヽ「ハテめんような。コレヽヽこの
亭主でも。かゝさまでも。ちよつと来てごらんなさい。わけく
あのふてゞござりますと「イヤコレそれは此の女へ。そこつかは
ゐませぬ「イヽエおかみさまされませぬ。大きなお世話でござ
りませう「ごうも今日がいゝね。さうきようがしなる
ごとありつてゐるぞ。コリヤアどうかさ。あの女とは猿と。
はなさうてつまでいつさりのごろう。女の出るまではは

猿は人の災難でござるぞ「イヤそれは私の猿でござる
ゆうきと「イヤヽヽきさまの所の猿がつく茶店の布子が。縁の
殺しをすりてゐるなぐ〳〵は猿はちよつとさりつさぬが。
丸裸でゐる「ナニそれがしもこの猿がそんななりをして
ませうか「何かしろあの女はこしが無で女房もあるし
るすごうぱいふでいさきね。テラヽの内ゆうしなくなつくさを。
きさまのうちもないとおもいます「デモ無理
だろう。ナニヽヽヽヽおでもありませう「それでこそ女の

ふりふれば猿をつれてゆく「ざとう　さるがかくさるのかわりになる
なら。猿手わざにはなれてござる　ト　ざとうも出さくなつて　ざとうにさるをわたしてゆくところへあるじ
もうさむしらまて。大きなどくを見るふろへくるのきうりかふろ。この女と田かへちつまて出。どんなさあしねていふて
「女　ヲヤそうかい
しいなんだえ「ざとう　そこお出なさりまし「ざとう　子ておまちかお。さとへいつて
「女　手がみにかゝりまし「ざとう　それとあつた。それといつていけばよいのに。
なぜ此猿を縛(つな)ぎなへていつて「女　イヤ口しではあるい「ざとう　どうぞ
つれぎ入と「女　アレあそこにある猿めが「ざとう　ヤア来ぐ猿がなる
ぞ「女　猿も離もゐますと「ざとう　ヤアくとのうちにはなんぞ猿どの

離どのと糀(こうじ)町の三河屋へいつて出ようぞ。ハイ〳〵「よめ　モシ健頭様が
猿におつかひかけてなんとございますと「ざとう　コリヤおもしろい。
あげましよ「よめ　ドレと見るうちの出合(であい)とて。そのところへ。
あいさつ。ハイ〳〵「ざとう　ドレへでかけてくれ。さてもなんだおや
うまくいつてござる　ト　なんにもいへばおひとをひろまてゆく。どんなまへ　きとしめてとまつれて　あいさつもそこくおくてゆく
おもしろさに　ぬすんでゐて
「ただ　なるほど世(よ)には猿ならずとも　あるものぞ。
かなへそこに同の見へ猿へりのとおさへにて　罷(つ)てゐる
やつぱり　ト　ひとりうちにひつけ　まゝやとうち出る

馬の糞
墨舎
一得
一ぜん

第五章

馬の糞とさらへ蝦蛄屋へ

鬱勃の千ね張

かくて鳴子の町なる素行けば。向ふに喧嘩とみえ。大勢人だちして。ある声におどろきまるを。行て見れば

女房。之どまりてみまべ。なまもおのへとみえてるが。お年お中りのおやぢ。

こゝへせふうるとごあくもきうね気の男とみえ行のさゑあるびろいの

つぎころ紙かって。こゝをあふをみえるで。くくもうくとひさうく

「ふて人ものでござりア。ヨリーが布のかごをきなくへ付てゐるの

糞を。あのもやうのごとくぬりまぶやアがる 男「十二どこのせへござって

おれがそんつけてさらへのごうろちもってあろうせへ 仲人「コリヤ

三吉めが。お主人の中に入れてあつきをさくりてもって

ひうみとまでかうさゆえ。お主人がかごさにあるもののどふ

よって知人もることあるく猫へとらへのごとさ。コリヤやめつとも

ぐが。三吉かも又大方でさらへのものをどれののへちく

猫へ。みえはけとめのがさらへふらさこゑあへとらへも。

ひと理屈あるくむり也へ おやぢ「イヤくそのふりろ。コリヤアされ

が糞ど 男「十二とあくどのくそをものがこまえるのくそどれ

「ハテなるのハそでもお亀がかくさるゝにあるやァ。お亀が
いそふちがひハない「ナアニこなさが。こんな丸ハいそをとれ
るものか「イヤ丸ハいそをとる亀もうが四角まいそをとる
もうが。おの亀が世話のやァなら揃へうちもつておまへやァ
られ「ナニまァこゝ。ならがいそをとるに。お亀が揃ふ
ものか「それハそうと又揃つてえやァお亀うでおく
ものか「ヲリヤ新造さまハなんでもいそへふさうして
目けるがよからう。ノヤ大屋さる「ならおどく。臣が

目しが御亭主へ割つけてやらう。コレ千歳緑をちよりと
われて来なさい「ナアニそうさんいりま甘ぬ。臣が目けて
やらう。ドレくちらくところハな「モシくそれぢやァあつち
のお客へおもうり。おつきなせうをやろうさもる「エヽごまつて
おろうぞ。うちのお客へ目けさのへ。ちつさくても精がよい
「それでくちをきくう芸者をば初めてやろう。
ちらしく。たこの亭主への状つてえく。バアひとつおまう
と「おまへこのへ言のおきくとさうおもへ「イヤそれハ

すゝりね「こいつもふくろに入れて煮出し。むし。かしらが
よろしうござります。コレ八百屋どのきさまは
まだ利(きゝ)であるまいが。ぶくろにいれてたてゝごらうじ
ませ「仲人」いかさまなア。ぢやとしても小料理(こりやうり)紙さるのどうで
はうふるのくそとやかけとるすりかへ。ゴリヤ大屋さま。
がのおまさるが。お吸(すひ)ものにおなさるなら。小口切(こぐちきり)にしてちよつと
独活(うど)に蕗(ふき)のとうの吸口(すひくち)などがよいとこうまいと思ひます「大や」それ
その細(ほそ)く丸(まる)で美味(うまみ)にまさるか。何であろうと煮ぬ

森ぱ。一ツこいつがかうじややうるるか。それの気もうるさしく。
ひとつのんぐぶよいそのうへでうらけ紙つけるぞ。それよりも
名の味噌(みそ)へコレがあいる「あつらへ」そんならば大屋さまへあづけませう。
モシ八百屋さま。あづかりをさるるには。およぶまいか「仲人」ナント大屋
さまこのおきをひろめるのか「大や」不足(ふそく)しらう。
きさまの不の雪隠(せつちん)をくまするはさし引(ひき)勘定(かんぢやう)
ひとそうト是(それ)にてけりんきおきなればこれ
まつとよく。おうしく機(はた)によくのせぬはまのつの

その
賽よりかへりてゆきゝをもめぐらしひとひとり折愛は
てらの西瓜うちまぜる

ゆかしさも
もしろいの
なしのはな

誹諧堀之内詣巻之中終

きよし
ねつからの蓮もしろい事
あらう

諺けふの智つはりわ居馬居
比んとりわぜんをいさらかれでもとれ

愚心舎道得

大坂新町[illegible]上

身の為

傾城[illegible]年[illegible]